エイズ説得に必要な情報の特定と その影響メカニズムの解明（3）：

HIV感染者・エイズ患者への態度に及ぼすエイズ情報の影響過程

深田博己・高本雪子

Specification of the required information for the effective AIDS persuasion and clarification of its influencing mechanism (3): Influence processes of AIDS information on the integrative attitudes toward person with HIV/AIDS

Hiromi Fukada and Yukiko Takamoto

本研究の目的は，PWH/A（HIV感染者・エイズ患者の総称）との共生行動生起過程モデルに基づき，対象者がこれまでに接してきたエイズ情報がPWH/Aに対する共生態度へ及ぼす一連の影響過程を明らかにすることであった。大学生403名を対象に質問紙調査を実施した。その結果，最終変数をPWH/Aとの共生行動意図に設定して同モデルの検証を行った高本・深田（2010）では，共感感情が認知変数へ影響を及ぼし，その認知変数が共生行動意図へ影響を及ぼしていたのに対し，PWH/Aへの共生態度を最終変数とした本研究では共感感情から共生態度へ直接的な強い影響がみられた。

キーワード：エイズ情報，HIV感染者・エイズ患者，共生行動生起過程モデル，PWH/Aへの共生態度

問　題

エイズ教育研究分野には，HIVへの感染予防教育とPWH/A（HIV感染者・エイズ患者）との共生教育の2つの下位分野があることを踏まえて，高本・深田（2010）は，説得研究分野におけるエイズ研究が全てHIV感染予防の促進を目的とする研究であり，PWH/Aとの共生の促進を目的とする研究が見当たらないと指摘した。そして，高本・深田（2010）は，社会心理学におけるPWH/Aとの共生研究の動向を分析し，その中でもPWH/Aとの共生態度に及ぼすエイズ情報の影響過程に関する研究に注目し，「HIV感染者・エイズ患者との共生行動生起過程モデル」を開発した。

HIV感染者・エイズ患者との共生行動生起過程モデルは，個人がこれまでに接してきたエイズ情報がその個人のエイズ知識を形成し，エイズ知識によって影響を受けた認知要因と感情要因がPWH/Aとの共生行動意図を規定するという4ステップモデルである。共分散構造分析の結果，仮定していたモデルに修正

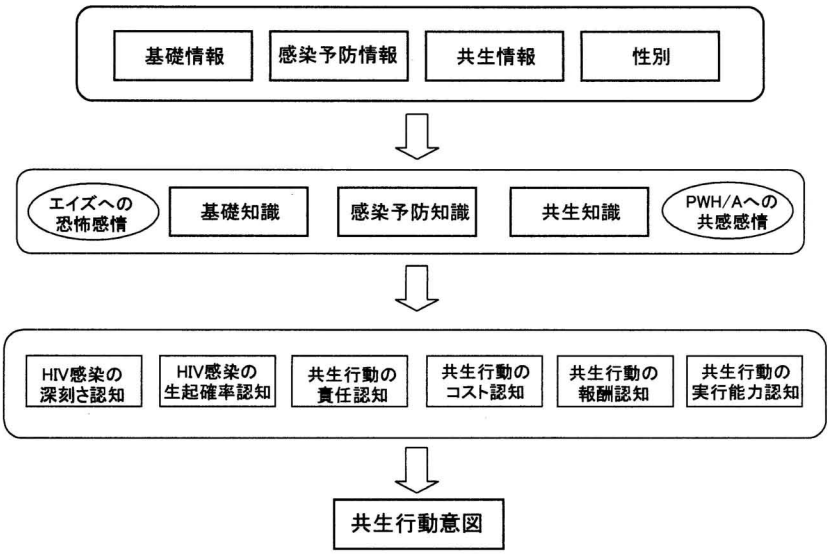

図1　PWH/Aとの共生行動生起過程モデルの修正版（高本・深田, 2010より構成）

が加えられ，当初第3ステップで仮定していた感情要因を第2ステップの知識と並列に位置づける方がモデルの適合度が高まった。そこで，最終的なHIV感染者・エイズ患者との共生行動生起過程モデルは，図1に示す形態をとることになった。

HIV感染者・エイズ患者との共生行動生起過程モデルの検証を行った高本・深田（2010）は，一部修正されたモデルの適合度が高く，最終変数である共生行動意図に対するモデルの説明力（決定係数R^2=.51）が51%に達することを証明した。そして，HIV感染者・エイズ患者との共生行動を促進する目的で説得を計画する場合には，人々の責任認知，報酬認知，実行能力認知を高める情報要素を説得メッセージに組み込むことが必須であり，それらの認知を安定的に高めるためには，HIV感染者・エイズ患者への共感感情を高める情報要素を説得メッセージに加えることが有効であると示唆した。

本研究の目的は，PWH/Aとの共生行動生起過程モデル（高本・深田，2010）の最終変数をPWH/Aへの共生態度に置き換え，対象者がエイズ情報に接してきた経験とその内容の主観的詳しさが対象者のもつ3つのエイズ知識と2つの感情要因に影響を及ぼし，それらの変数によって形成された6つの認知要因がPWH/Aへの共生態度に影響を及ぼすという4段階モデルの検証を行い，エイズ情報との接触経験がPWH/Aへの共生態度に及ぼす影響過程を明らかにすることである。

方　法

1. 調査時期と調査対象者

2006 年 7 月に，2 つの大学に所属する大学生 403 名に対して，無記名式による質問紙調査を実施

した。回答に不備のある者を除いた結果，最終的な分析対象者は383名（男性224名，女性159名，平均年齢19.3歳（*SD*=1.58））となった（有効回答率95.0%）。

2. エイズ情報に関する質問項目

①基礎情報，②感染予防情報，③共生情報のそれぞれについて，どのような内容の情報成分が含まれるか明記した上で，学校，マスコミ，口コミそれぞれを通して，各情報をどの程度見聞きしたことがあるか回答させた。評定は，「非常に詳しく見聞きした（4点）」から「まったく見聞きしたことがない（1点）」の4段階評定であった。今回発表する分析については，3つの情報源の総和を用いている。すなわち，各エイズ情報の得点範囲は3〜12点であり，得点が高いほど，各エイズ情報を詳しく受け取った経験をもつことを示す。

3. エイズ知識に関する質問項目

「基礎知識」，「感染予防知識」，「共生知識」の測定は，本田（2006），市川・木原・木原（2002），岩室（1996）および構造社出版（2000）を参考にして作成した各8項目からなる記述に関して，その記述が正しいと思えば解答欄に「○」，正しくないと思えば「×」，わからない場合は「△」を書くよう求め，その正当数を得点とした。したがって各エイズ知識の得点範囲は0〜8点となり，得点が高いほど各エイズ知識が高いことを示す。全24項目の詳細は高本・深田（2008）で紹介した。

4. PWH/Aとの共生行動生起過程モデルで仮定される6つの認知要因に関する質問項目

6つの認知要因に関しては，木村（1995）で作成された防護動機理論で仮定される認知要因の尺度項目を参考に作成した。すなわち，①HIV感染の深刻さ認知（HIVへの感染は深刻なことだと思う），②HIV感染の生起確率認知（運が悪ければ，将来自分自身がエイズウイルスに感染する可能性もある），③共生行動をとることへの責任認知（自分には，この行動を実行する責任がある），④共生行動へのコスト認知（この行動は，自分にとって，実行に伴う負担が大きい），⑤共生行動の報酬認知（この行動を実行することによって，自分は多くのものを得ることができる），⑥共生行動の実行能力認知（自分には，この行動を実行するのが難しい（逆転項目））の6つの認知要因は，それぞれ1項目ずつで測定した。評定は，「非常にそう思う（4点）」から「まったくそう思わない（1点）」の4段階評定であった。したがって得点範囲はそれぞれ1〜4点であり，得点が高いほどそれぞれの認知が高いことを示す。なお，③〜⑥の認知要因については，共生行動ごとに測定した。

5. PWH/Aとの共生行動生起過程モデルで仮定される2つの感情要因に関する質問項目

①エイズへの恐怖感情については，原岡（1970）の恐怖感情測定尺度を因子分析した木村・深田（1995）より「不安・恐怖感情」因子に含まれた5項目のうち，因子負荷量の大きい「心配な」，「不安な」，「恐ろしい」，「気がかりな」の4項目を名詞形に変換して使用した。評定は「まったく感じない（1点）」から「非常に感じる（4点）」の4段階で行った。したがって得点範囲は4〜16点であり，得点が高いほどエイズに対して強い恐怖感情をもつことを示す。

②PWH/Aへの共感感情については，筆者が独自に作成した「PWH/Aの気持ちがわかる」，「PWH/Aの苦しみを考えると，とてもつらい」，「PWH/Aが冷たくされているのを見ると，非常に腹が立つ」，「PWH/Aについての話を聞くと，その人たちと同じような気持ちになる」，「PWH/Aに共感を覚える」の5項目について，「非常にそう思う（4点）」から「まったくそう思わない（1点）」の4段階

で評定させた。得点が高いほど，PWH/A に対して強い共感感情を抱いていることを示す。

6. PWH/A に対する共生態度に関する質問項目

PWH/A に対する共生態度については，「現実的に考えて第三者である私は，エイズウィルス感染者やエイズ患者に何もしてあげられないと思う（逆転項目）」，「周囲の人から差別されているエイズウィルス感染者やエイズ患者がいたら，私はその人をかばい，守ってあげると思う」，「私はエイズウィルス感染者やエイズ患者を支えていく立場でありたいと思う」，「エイズウィルス感染者やエイズ患者に同情はするが，自分から何かしてあげようとは思わない（逆転項目）」，「親友がエイズウイルスに感染していると突然知らされても，その人とこれまで通りに接するだろう」の 5 項目について，「非常にそう思う（4 点）」から「まったくそう思わない（1 点）」の 4 段階で評定させた。PWH/A に対する共生態度得点は，5 項目の合計得点を用いた（α=.65）。従って得点範囲は 5〜20 点であり，得点が高いほど，PWH/A に対してポジティブな共生態度を有していることを示す。

7. 人口統計学的特性に関する項目

被調査者の性別と年齢を回答させた。

結果と考察

PWH/A との共生行動生起過程モデルに沿って，共分散構造分析を実施した。このモデルに含まれる責任認知，コスト認知，報酬認知，実行能力認知の 4 つの認知要因に関しては，4 種類の共生行動ごとに測定を行った。そのため，本来なら 4 つのモデルを検討すべきである。しかし共生行動意図を最終変数としてこのモデルの検証を行った高本・深田（2010）の結果，共生行動の種類によって結果に大きなちがいがみられなかったことから，これらの認知要因については 4 つの変数の平均値を用いた「統合モデル」のみを検討することとした。

統合モデルの主な適合度指標は，*GFI*=.911，*AGFI*=.885，*RMSEA*=.049 といずれも採択可能な基準に達した（図 2）。PWH/A への共生態度に対して最も強い規定力を示したのは共感感情であることが分かる。

1. 第 1 ステップの情報と性別の影響

図 2 を詳細に分析すると，第 2 ステップの知識と感情に対して最も大きな影響力を示す第 1 ステップの情報は基礎情報であった。基礎情報は，基礎知識，感染予防知識，共生知識を有意に促進し，恐怖感情と共感感情を有意に促進していた。このように，基礎情報は，3 種類全ての知識と 2 種類全ての感情に対して影響力持つ中核的な情報であることが判明した。

次に，共生情報は，共生知識と共感感情を有意に促進していた。共生情報は，限定された範囲の影響力ではあるものの，予想通り，共生知識を増加させ，共感感情を高めるのに役立つことが明らかとなった。これに対して，感染予防情報は，3 種類の知識と 2 種類の感情のいずれに対しても全く影響していないことが分かり，予想と異なる影響力の低さが示された。

なお，第 1 ステップに置いた性別（男性 1 点，女性 0 点のダミー変数）は，第 2 ステップの恐怖感情と共感感情に有意に影響し，第 3 ステップの深刻さ認知にも有意に影響していた。すなわち，男性よりも女性の方が，恐怖感情と共感感情が高く，深刻さ認知も高いことが判明した。

2. 第 2 ステップの知識と感情の影響

第 2 ステップの知識は，第 3 ステップの 6 つの認知に対してあまり影響を与えないが，感情は大きな影響を与えることが解明された。知識の影響に関しては，感染予防知識が生起確率認知を有意に促進し，共生知識が深刻さ認知を有意に促進することが示されるにとどまった。予想に反して，基礎知識の影響は全く認められなかった。

これに対して，恐怖感情は，深刻さ認知と生起確率認知を有意に促進し，第 4 ステップの PWH/A への共生態度を有意に抑制していた（否定的な方向に共生態度を変化させていた）。

共感感情の影響力は顕著であり，責任認知，報酬認知，実行能力認知を有意に促進し，コスト認知を有意に抑制していた。責任認知と報酬認知への共感感情の影響力は特に大きかった。さらに，共感感情は，第 4 ステップの PWH/A への共生態度を有意に促進しており（肯定的な方向に変化させており），共感感情の増大が PWH/A への共生態度の改善に決定的な役割を果たしていることが実証された。

3. 第 3 ステップの認知の影響

第 3 ステップの 6 つの認知は，予想に反して，第 4 ステップの PWH/A への共生態度に対してあまり影響を示さなかった。わずかに，報酬認知と実行能力認知が PWH/A への共生態度を肯定的な方向に変化させ，コスト認知が否定的な方向に変化させることがみられるにとどまった。

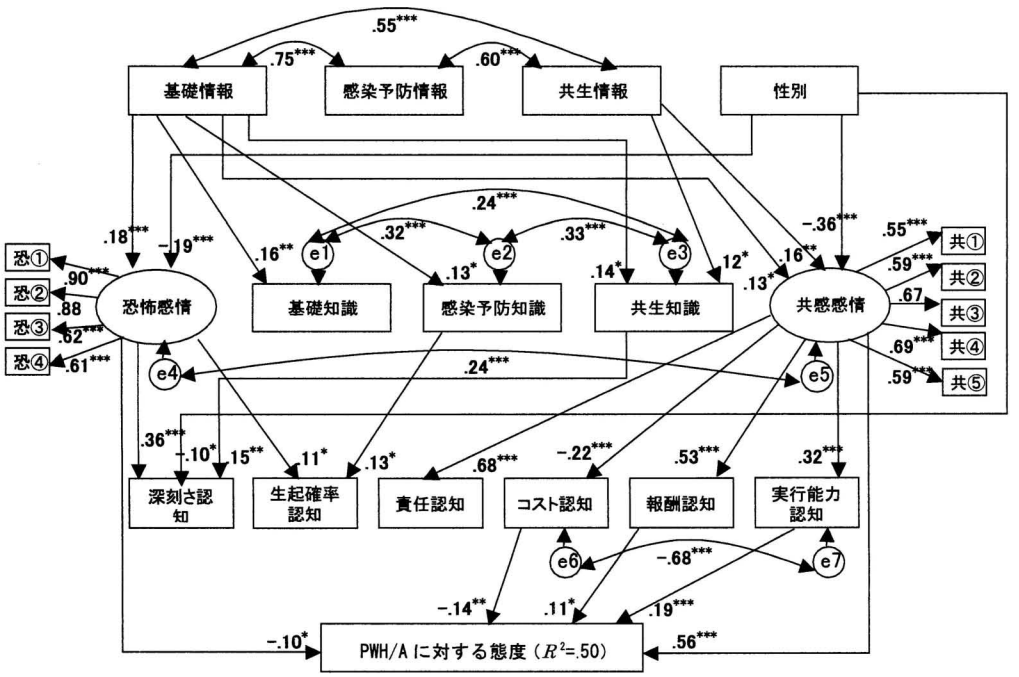

図 2　共生行動生起過程モデルに沿った共分散構造分析の結果

4. PWH/A への共生態度に対するモデルの説明力

HIV 感染者・エイズ患者との共生行動生起過程モデルは，最終変数である PWH/A への共生態度を 50%も説明できることが，決定係数（R^2=.50）から明らかとなった。

5. 本研究の結果と高本・深田（2010）の結果の比較

PWH/A との共生行動意図を最終変数とした高本・深田（2010）では，共感感情が認知変数へ影響を及ぼし，その認知変数が共生行動意図へ影響を及ぼしていたのに対し，PWH/A への共生態度を最終変数とした本研究では，共感感情から共生態度へ直接，強い影響がみられた。二つの研究における結果の食い違いは，行動意図が認知によって規定される割合が高いのに対して，共生態度が感情によって規定される割合が高いことを示していると解釈できる。行動意図と共生態度の性質の違いを示唆する結果として，高本・深田（2010）と本研究は評価できるであろう。

また，PWH/A への共生態度を最終変数とした本研究におけるモデルの説明力は 50%であり，高い説明力を示した。これは，PWH/A との共生行動意図を最終変数とした高本・深田（2010）の研究における説明力 51%と極めてよく一致している。こうした両研究の結果から，最終変数を PWH/A との共生行動意図とした場合でも，PWH/A への共生態度とした場合でも，モデルは同等の説明力を持つことが明らかとなった。

以上のように，HIV 感染者・エイズ患者との共生行動生起過程モデルは，最終変数が PWH/A との共生行動意図の場合（高本・深田, 2010）と PWH/A への共生態度の場合（本研究）で同等な高い説明力を示すことが解明され，モデルの妥当性が裏付けられた。しかし，PWH/A との共生行動意図の生起過程では，共感感情が認知変数へ影響を及ぼし，その認知変数が共生行動意図へ影響を及ぼすという過程が存在しているが（高本・深田, 2010），PWH/A への共生態度の生起過程では，共感感情から共生態度へ直接的な強い影響が存在することが実証された。

注） 本研究は，平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C），課題番号：17530451，研究代表者：深田博己，研究題目：エイズ患者との共生およびエイズ感染予防を促進するエイズ教育用教材の開発）による助成を受けて実施した。

引用文献

原岡一馬　(1970).　態度変容の社会心理学　金子書房

本田美和子　(2006).　エイズ感染爆発と SAFE SEX について話します　朝日出版社

市川誠一・木原雅子・木原正博　(2002).　エイズ啓発を振り返って　日性感染症会誌，**13** (1)，26-31.

岩室伸也　(1996).　エイズ―いま，何を，どう伝えるか―　大修館書店

木原正博・木原雅子　(2003).　日本のエイズ流行の現状と今後の展望　現代医療，**35**，1392－1396.

木村堅一　(1995).　エイズ予防行動意志に及ぼす脅威の大きさ，対処行動の効果性およびコストの効果―脅威アピールにおける修正防護動機理論の検討―　広島大学教育学部紀要　第一部（心理学），**44**，59-66.

木村堅一・深田博己　(1995).　AIDS 患者・HIV 感染者に対する偏見に及ぼす恐怖－脅威アピールのネガティブな効果－　広島大学教育学部紀要　第一部（心理学）, **44**, 67-74.

構造社出版　(2000).　すてっぷあっぷエイズの本　構造社出版

高本雪子・深田博己　(2008).　HIV 対処行動意思と HIV 感染者・AIDS 患者への態度に及ぼす AIDS 情報の効果　対人社会心理学研究, **8**, 23-34.

高本雪子・深田博己 (2010). エイズ説得に必要な情報の特定とその影響メカニズムの解明 (1) : HIV 感染者・エイズ患者との共生行動意図に及ぼすエイズ情報の影響過程　説得交渉学研究, 2, 印刷中.